

農山村におけるコミュニケーションと インターネット

—＜地域社会＞と＜仮想社会＞—

野 崎 賢 也

はじめに

電子メディアの発達、特にインターネットの普及によって、メディア論・コミュニケーション論はますます隆盛を極めようとしている。たしかに、新たなコミュニケーションの可能性が飛躍的に広がったことは疑いなく、今日の社会は何らかの変化・変動を始めているという認識は一般的なものになりつつある（例えば[吉見,1994]、[岡部,1996]）。そうしたメディアやコミュニケーションをめぐる議論で強調されるのは、ヴァーチャル＜仮想＞空間の中での関係性、そしてリアリティの多層性・多様性とその変容であり、メディアと権力の政治学である⁽¹⁾。あるいは、「ユートピア」としてのネットワーク社会への熱烈な願望であり、逆に、「ブーム」としての電子メディア社会論に警鐘を鳴らしながら実践の場においての変化を過小評価しようとする議論もある⁽²⁾。

サイバースペース（電腦空間）という新たな社会空間内でのコミュニケーションについて議論が発展し、よりいっそう混沌としていく一方で、それらの新たなコミュニケーションが現実の生活世界とどのような関わりを持ち始めているのか、具体的にどのような変化を産みだしつつあるのか、＜仮想社会＞と＜現実社会＞の境界（接触面）を実践の現場から積極的に取り上げている報告は未だに少ない。現在必要なのは、未来への予言ではなく、実践の場面に基づいた具体的な報告を積み重ねていく作業ではないだろうか。

そして、こうした＜仮想社会＞の刺激によるコミュニケーション形態の変動を探る際に、その調査の対象とされ関心が払われるのは、ほとんど例外なく現代の都市化された社会や都市文化の産み出す出来事であり、ビジネスや若者や風俗といったキーワードによって語

⁽¹⁾こうした流れの議論の例として[吉見,1994]、[今田,1993]、[西垣,1995]などがあげられる。

⁽²⁾例えば、[佐藤,1996]では、ビジネスや企業・組織について議論されているけれども、現実の地域社会の中での生活レベルでの変化という視点は見ることができない。

られる現象であって、そこには一方的な偏りが存在している。

この意味で、＜地域社会＞という単位が未だ相対的に重要な意味を持つ現在の農山村におけるコミュニケーションについて、新しいメディアによる＜仮想社会＞との遭遇という経験とそれによる変化を記しておく価値は十分に存在するはずである。過去、農村社会におけるコミュニケーション研究は、イエやムラ、あるいは地域という枠を当然の前提として行われてきたけれども、現在の変化は従来の枠を超えた新たな社会関係が構築されていく可能性を示唆している。こうした状況において、農山村という＜地域社会＞と新たなメディアが創り出す＜仮想社会＞との間を対象にしたコミュニケーション研究はその端緒にすぎたばかりであり、研究の方向は確立されているわけではない。＜地域社会＞の視点から＜仮想社会＞との諸関係を位置づけていく作業は、まず手探りで始めなければならないのである。

本稿では、このような課題の下に1990年代半ばの農山村が、新たな電子メディア・ネットワークにどのように対応し＜仮想社会＞と関わっていくのか、それによってどのような変化が起こっているのか、そして高度成長期以降の農山村の変容という歴史的文脈のなかで現在の経験はどのような意味を持っているのか、こうした幾つかの関心をもとに筆者がボランティアとして関わった地域活動の一つの事例を取り上げていきたい。現時点においては、インターネットなどの新たな電子メディアが社会に浸透しつつある初期の段階であることから、本稿は早急に結論を導き出すという形をとらず、現在進行形のプロジェクトをラフなスケッチのレベルで報告することを第一の目的とする。農山村という＜地域社会＞が新たなメディアと接触し経験を蓄積していく、その「始まり」のあり方を素描しておく必要があると考えるからである。

1 ＜地域社会＞と電子メディア・ネットワークの遭遇

初めに、＜地域社会＞におけるコミュニケーションに焦点をあわせた研究についてその成果を整理しておく必要があるだろう。

最近の例として、地域情報システムとしてのCATV（ケーブルテレビ）についての詳細な研究が行われている[東京大学社会情報研究所,1996]⁽³⁾。CATVの導入・発展の段階を簡単にまとめると、まず難視聴対策として電波受信条件の悪い地域に導入されたことからその利用が始まり(1)、次に、自主放送を行う「地域メディア」としてのCATVが登場し(2)、

⁽³⁾CATVについての研究としては、[児島・橋本,1996]第12章なども参考にした。

その後規模拡大と多チャンネルを特徴とする都市型ケーブルテレビの発展(3)、様々な通信サービスを展開するケーブルテレビの登場(4)まで、現時点で4段階に整理することができる。

このCATVの発展の歴史から分かることは、CATVが対象とする＜地域社会＞がより都市化・大規模化する方向にあること、および従来のマスメディアの延長としての性格（情報の一方通行）を未だ脱していず、双方向のコミュニケーションの実現は現時点で可能性の段階に止まっていることの2点である。＜地域社会＞の観点から見ると、CATVはより小さなく地域＞を対象とすることから始まり、その後はビジネスとしての側面が追求され大規模化＝都市化という流れで発展しており、小規模な「地域メディア」としての性格は逆に薄れてきているのが現状であると考えられる。また、CATVは上記(2)の段階以降、双方向通信の手段としての可能性が注目されていながら、双方向性の実用化に向けてまだ多くの問題が残っているといえる。

ここで＜地域社会＞におけるコミュニケーションという視点からメディアとしてのCATVの現状をまとめてみると、大規模な設備投資が必要であることからより小さな単位を対象とすることは不可能であること（ハード面）、地域内外への双方向コミュニケーションの手段としては不十分であり従来のマスコミと同様に「中央」からの一方的な情報流通という形が一般的であること（ソフト面）があげられるのではないだろうか。

また＜地域社会＞のコミュニケーションを考える際に、CATV以外のメディアとして重要であると考えられるのは地域のパソコン通信（BBS）であろう。例えば、農業の情報を扱う地域レベルのパソコン通信ネットは、1995年末の時点で日本全国に80局以上存在している[農業情報化年鑑1996]。非公開のネットやごく小さな草の根レベルのものも含めると、100以上の農業情報を扱う地域パソコン通信ネットが開局していることになる。これは単純に1都道府県に2つ以上の割合だと考えることができる。こうした農業関係のパソコン通信ネットは、市町村を中心とする自治体レベルのものや広域農協などを中心とする郡単位のものから、農家自ら構築する草の根レベルのネットまで既に数多く存在している。

けれども、地域のパソコン通信ネットワークについての研究は極端に少ないのが現状である⁽⁴⁾。上にあげた農業分野のパソコン通信ネットは一つの例として、こうした農山村の「情報化」、言い換えれば＜地域社会＞における「双方向」の電子メディア・ネットワー

⁽⁴⁾大分県の地域パソコン通信ネットCOARAをフィールドにしての研究[成田, 1992, 1993]などがあるが、その主要な対象は個人のコミュニケーションについてであり、＜地域社会＞との関連性は重視されていない。

クの普及状況は、現代社会のメディアやコミュニケーションを語る際に見落とされがちな部分だといえよう。こうした農業情報に代表される地域ネットワークについて、技術やビジネスという側面から論じられる機会はそれなりに存在しているけれども⁽⁵⁾、＜地域社会＞の中でのコミュニケーション、あるいは＜地域社会＞を越えたコミュニケーションという観点からの社会学的研究は非常に少ないのである。

このような研究状況の中、琵琶湖をめぐる地域BBS「湖鮎ネット」について、その創始・運営者である嘉田・大西による「一人称」での報告[嘉田・大西,1996]は、＜地域＞を意識した例外的なネットワーク研究といえることができる。「湖鮎ネット」立ち上げの経緯から、そのネットが意図した方向と影響、そして成果が詳しく報告されている。例えばパソコン通信の特徴として、電子メディアの即時性・遠隔地通信という一般的な特性に「蓄積性」「非同期性」を持ち込んだこと、そして従来のメディアに欠けている不特定多数を相手にした「双方向性」によって現実社会のなかでの境界を越えてコミュニケーションが触発され活発化することが、地域BBSという「メディアをもつことの社会的な意味」として述べられている。

また、電子メディアに関する議論で取り上げられることの多い電子的コミュニケーションにおけるリアリティについて、嘉田・大西は実践の経験からの重要な指摘も行っている。吉見俊哉は電子メディアによる出会い（コミュニケーション）の特徴を、「その時間・空間的な脱文脈性において対面的な出会いともっとも顕著な対照をなし」、「時間・空間的な距離を無化してしまう」ことだと述べている[吉見, 1994:p53]。仮想現実（バーチャルリアリティ）について様々な語りが氾濫している現在、こうした見解は一見妥当に思えるのだが、嘉田・大西が実践の場を通じて得た感触は「むしろ吉見の論とは逆であり、電子的コミュニケーションによる“文脈の再構成”が可能ではないか」ということであった[嘉田・大西,1996:p231]。つまり、通常は全く無縁のそれぞれ異なった社会空間で生活している参加者が、パソコン通信という電子メディアを介した非対面的・匿名的な状況で交わす会話であっても、よりリアリティを持ったコミュニケーションが構築されていく場合も存在するということのである。

新たな電子メディアと社会の関係について実際のフィールドレポートが行われるようになったその当初より、実践的経験に基づいて報告されてきたのは、時間・空間を越えた“文脈の再構成”、すなわち人と人とのコミュニケーションの活性化・濃密化の傾向であっ

⁽⁵⁾例えば農業情報利用研究会による『農業情報化年鑑1996』では、市場情報、気象情報、あるいは個々の農家の産直管理や、栽培技術への応用（遠隔管理や自動化）など、パソコンのネットワークの様々な利用方法が検討されている。

た。例えば、ラインゴールド[Rheingold,1993]や尾野[尾野,1994]など地域BBSネットワークへの実際の参加者による報告は、概して電子的コミュニケーションの熱気、リアリティに溢れ社会性豊かな電脳空間の様子を伝えていた。それは、「オフライン・ミーティング」と呼ばれるパソコン通信の参加者が現実会する機会との相互作用によってさらに効果を発揮する。電子的なネットワーク上において「情報を持っている人のほうが、情報そのものよりもずっと魅力的」だというラインゴールドの感想はこのことを的確に表現している。

電子的なネットワークが社会に浸透する過程で、このようなコミュニケーションの活性化・濃密化が発生していることは無視することのできない現象なのである。一方で、匿名性が悪用され多重人格の存在が可能な仮構の世界、リアリティが変幻自在に紡ぎ出される仮想現実の世界も確かに拡大している。電子メディアが創り出す新たなネットワーク社会について、これらの両面を考慮に入れて語られなければならないのは明らかであろう。

このように実践の現場からの重要な指摘を含んだ嘉田・大西の報告であるが、それが対象とするのはあくまで電子ネットワーク上での出来事に限定されている。つまり＜仮想社会＞という閉じた世界の内部を扱うのに止まっており、＜仮想社会＞に反映される＜地域社会＞という視点はあっても、＜地域社会＞に反映される＜仮想社会＞という逆の視点は取り上げられていない。今後は、電子的ネットワークが社会に浸透していくにつれて＜地域社会＞と＜仮想社会＞の交差による相互作用のあり方を見極めていく必要があるだろう。

以上のように代表的な先行研究を整理したうえで、あらためて本稿の課題を明確にしておこう。

まず＜地域社会＞の内部および外部とのコミュニケーションに、新たなメディアとしての電子的ネットワーク（特にインターネット）はどのような影響を与え始めているのか、その様子を現在進行形でレポートしておくことである。都市社会・都市文化との相関において現代の経験が語られる機会が多くを占める中で、同時代の農山村へもそれらは確実に浸透していることは見逃されてはならない。電子的ネットワークが創り出す＜仮想社会＞と現実の＜地域社会＞とがどのように出会い、交差していくのかを本稿で素描していきたい。

また、こうした新たな電子的ネットワークを論ずる際に、その外部から傍観的に語るのではなく、参与観察者として実践に基づいた「一人称」での報告を行うことも目的の一つである。社会の中に新たな経験が浸透しつつある段階においては、抽象的な一般論以上に、個々の事例と経験に即した記述を積み重ねることが必要であろう。本稿は、筆者がボランティアとして当初から関わってきた活動を事例として取り上げる。

2 山村のインターネット利用 —高知県大正町の『電脳中津川小学校』の事例—

高知県幡多郡大正町は、四万十川中流域にある農林業の町である。町の中心部から車で30分ほど山の奥に入ったところに中津川という小さな集落がある。この中津川地区によるインターネットを利用した地域活動を、筆者はボランティアとして当初から支援してきた。日本の山村はどこでも多かれ少なかれ過疎の問題を抱え、小さな学校は生徒減のために休校・廃校になりつつある状況の中、中津川地区の小学校も今年の春に卒業生が2人出た後は在校生が3人だけになることから平成7年（95年）度限りで休校することに決定していた。休校になったこの中津川小学校を、インターネット上の「電脳空間」にヴァーチャル（仮想）小学校として継続していくことが筆者が関わった地域活動の中心である。現実の小学校は休校となったけれども、人口流出・高齢化が進む典型的な中山間地域にある中津川という小さな集落が近い将来、人口構成のアンバランスを是正し復校できるまでの間、「地域の心の学校」としての仮想小学校をインターネットを利用して続けていこうということである。このヴァーチャル小学校＝『電脳中津川小学校』は、中津川という小さな集落の範囲に止まらない空間的な広がりを持っている。年齢や職業・地域を問わず参加は自由。同級生および先生をインターネット上で広く募集している。

四万十川流域での社会調査を進めていく過程で、この中津川という集落に関わるようになった私は、この計画の立ち上げからボランティアとして協力している。以下では、活動に内側から関わった当事者としてその途中経過を報告し、同時に参与観察者として現在進行形で起こりつつある変容の過程をスケッチしていきたい。

a)大正町・中津川地区の概況

まず、大正町および中津川集落の概要をまとめておこう。

大正町は、高知県の西部（幡多郡）四万十川の中上流域に属する中山間地にある。人口は約3600人で、高齢化と人口減少が進む典型的な過疎の山村とっていいだろう。65歳以上の高齢者が全人口の約21%（778人）を占めているが⁽⁶⁾、この数値は高齢化率が全国トップクラスの高知県内の市町村のなかでは中位に属している。町内の土地利用状況は林野率が92.2%となっており平地は非常に少ない⁽⁷⁾。就業構造は、一次産業従事者487人、二次産業527人、三次産業813人であり、農業・林業および建設業などが主要な産業である。農業

⁽⁶⁾人口構成を見ると、15才未満664人、15才～24才228人、25才～64才1960人、65才以上778人となっている。

経営規模は零細で、農家一戸当たりの経営面積は68aとなっている。山間部のため耕地整理にも限度があり小規模な農地が多数を占めており営農条件はよくない。農業については自給的側面が強く、水稻・果樹・林産等との複合経営であり、また建設・山林労働との兼業が大多数である。大正町から高知市までは約100kmの距離があり、公共交通機関はJR予土線のみ、高知市内までの所要時間はJR（特急乗り継ぎ）で約2時間^⑧、乗用車を用いても同様に約2時間かかり交通はかなり不便である。そのため高知市内までの通勤は非常に少なく、通勤圏は近隣の窪川町・須崎市あたりまでである。

筆者が大正町を見た実感として、こうした客観的データ以上に過疎化や高齢化という言葉を実感している。統計的な情報だけによってはこの町の状況を正確に把握するのは困難であろうが、日常生活の感覚から見れば、多くの要素が過疎化や高齢化を物語っている。例えば教育について取り上げてみると、15才～24才の占める人口が極端に少ないことから分かるように（大正町には普通高等学校が一つあるものの）かなりの割合で町外の学校に通学する生徒が存在する。公共交通機関が少なく通学に不便な地域であるため、高知市内の学校に行くには下宿や寮に入るのが前提となり、父兄の負担も大きい。大学に進学し卒業したとしても、大卒として十分な待遇のある就職口は行政機関など以外にはほとんど見つけられない。こういった学童の教育問題は過疎化・高齢化のすすんだ中山間地を象徴しているといえよう。

高度成長期以前には、こうした山村にもまだ賑わいがあったという。大正町はかつて四万十川流域の木材の集合地として多くの労働者や商人を集めた土地であり、またエネルギー構造が転換する以前は炭焼きという重要な山の産業もあったのである。

中津川地区は、大正町の中心部からさらに車で約30分ほど奥に入っていかなければならない。四万十川の中でも最大の支流・梶原川に合流する中津川に沿って狭い1車線の道を遡っていくと山の間にほんの少しだけ広がった平地があり、そこが中津川の中心集落である。中津川地区は全体で、約40戸・110人の小さな集落であり、人口の7割が60才以上という高齢化が非常に進んだ地区である。

b) 中津川地区と小学校

中津川の集落のほぼ中心部に中津川小学校がある。明治9年に創立され平成8年までの120年間に533名の卒業生を送り出してきた小学校である。けれども、平成7年（1995）度

^⑦土地利用総面積19,951haのうち、山林18,495ha（うち国有林が6404ha・国有林率34.8%）、田180ha、畑29ha、樹園地102ha、宅地34ha。

^⑧予土線から途中の窪川駅で特急に乗り継ぐ。

の全校生徒5名、平成8年（1996）春に卒業生が2人出た後は在校生が3名となることから、この年の春をもって休校になることが決定していた。中津川小学校のPTAの1人林幸一さん（36）とは四万十川流域の山村の調査を進めていく過程で知り合いになり、ここから筆者と中津川の関係が始まることになる。

林さんは、この中津川という小さな集落で椎茸栽培や山林経営などを行っている若手の専業農林家である。林さん宅は小学校のある中津川地区の中心からまだ少し山を奥に入った森ヶ内という集落にある。中津川地区の最も奥にあたる森ヶ内集落は全部で8戸。けれどもこの小さな集落には林さんの子供達3人がおり、そして三十代半ばの林さん夫婦が暮らしていることによって、山間の小さな集落であっても活気があるように感じられる。去年までは、中津川小学校の5名の児童のうち、林さんの子供達で過半数を占めていたことになる。林さんは高知市近郊の農業高校を卒業した後、地元でUターンした。中津川地区そして大正町でも数少ない若手の専業農林家である。

中津川地区では、林さんなど学童の親が中心となって様々な地域教育活動が行われていた。例えば、子供達が管理して養殖したアメゴ（アマゴ）を使っの釣り大会や、地元産の木材を贅沢に使ったログハウス作りには住民の殆どが参加していたし、祭りや年中行事などの際には高齢者と子供達との世代間交流を積極的に行っていた。こうした地域ぐるみの教育活動の中心になってきたのは中津川小学校である。

一般的に、過疎化・高齢化が進む中山間地域では、学校が様々な意味で地域の核になっていると言える。小学校に通う子供達とその親の世代が必然的に地域活動の中心となっているからである。この意味で、山村などの過疎地域にとって学校という「場」が果たす役割は非常に大きなものがあるといえる。教育の場面を通しての世代間交流、あるいは地域間交流が山村の小さな集落にとって貴重な機会となっているのである。

こうした地域活動の中心の「場」となっていた小学校が休校になることで、中津川集落の人々の落胆は大きい。毎年の小学校の運動会には高齢者も含めて集落のほとんど全ての人が参加していたが、学校がなくなることによって集落の構成員が揃って参加する行事が少なくなったのである。「子供達のためには、休校もしかたがない」と林さんは言う。統合先の学校に行けば友達も増えるので、子供達にとっては休校が悪だと単純に考えることは出来ない。しかし、子供達を周囲で見守って来た中津川の大人達にとっては、小学校に子供がいなくなることは、地域から子供がいなくなることと同じで非常に寂しいことだと言う。

c)『電脳中津川小学校』の開校

林さんと知り合いになってから幾度か、パソコンやパソコン通信についての質問を受けた。林さんは既にパソコンを所有しておりパソコン通信の機能に注目していたので、山村の地域活性化になんとかパソコン通信のネットワークを利用できないかということを経験あるごとに熱心に話し合うようになった。96年の1月、林さんが企画して、授業時間を使って中津川小学校の児童にインターネットの体験をさせてやることになり、私がパソコンを持ち込んでインターネットに接続してその世界を子供達に覗いてもらった。パソコンに電話回線一つを繋ぐだけで、世界中の情報、ホームページを見ることができる。この体験がインターネットを非常に身近なものに感じさせたようである。WWWホームページを作った簡単に情報発信が可能であることを目前に見て、早速、何を発信するかということを経験を中心にして大正町内外の有志と話し合うようになった。この場で、中津川小学校が休校になることが話題になった。地域の力を失わないためにも何らかの形で小学校を生かす機会が作れないかと考える中で、中津川小学校をインターネット上のWWWホームページでヴァーチャル（仮想）小学校として続けていくことを発案したのである。地域の大人と子供が一緒になって遊び学べる「場」として、そして中津川小学校の思い出を生かし続ける「場」として、そして地域外へ向けての情報発信の手段としてインターネット上のサイバースペース（電脳空間）を利用するのである。このヴァーチャル（仮想）小学校を『電脳中津川小学校』と名づけ、地域内外のボランティアと林さんを中心とした中津川小学校のPTAが協力して準備を開始した。

d)『電脳中津川小学校』の活動内容

『電脳中津川小学校』は、1996年6月にインターネット上に開校した。

この『電脳中津川小学校』の活動内容を簡単にまとめると以下のようになる。

- 1)子供達の手で地域の紹介を行うこと。地域の行事や活動子供達の視点を中心に発表していく。
- 2)地元の自然や農林業の技術、歴史や文化など授業内容に応じて、最も適した人に先生になってもらう。正規の学校教育の枠組みにとらわれない柔軟な構成にする。例えば、地元の人に先生になってもらったり、専門家をインターネットで募集したり。校長先生は、中津川小学校の卒業生である林さんの祖父・林叶さん（82）が務める。
- 3)授業を媒介にした生徒間の交流。中津川の生徒と一緒に地域のことを学んでいく「電脳同級生」を募集する。「電脳同級生」には年齢制限を設けず、地域外から誰でも参加できる。

4)学校休みの期間中には、電腦同級生達が実際に中津川に集まり、現地授業を開催する。そこで他の地域の同級生と交流し、日常のインターネットを用いた交流にも繋げていく。

ホームページ上で最初に行った授業は、高知県生態系保護協会・中村滝夫さんによる「めだかの話」であった。「めだかは、誰に食べさせてもらっているのでしょうか?」というような質問を宿題としてインターネットを通じて解答してもらい、高知市内の小学生や都会のサラリーマン、大学生などが宿題を提出し、「電腦同級生」の仲間に入った。

そして96年の夏休みには「電腦同級生」達が実際に大正町中津川小学校に集い、小規模な現地スクーリングを行った。授業の内容は「川で遊び、山で遊ぶ」。東京、大阪、高知市内などからインターネットを通じて申し込んできた若者や家族連れ計30名ほどが中津川に集まり、地元中津川集落からは林さん一家をはじめ子供から大人まで参加し、総計50名ほどがスクーリングとキャンプを行った。

また96年11月には、去年まで小学校が開催していた運動会を中津川地区として存続させていくことになり、中津川運動会が開かれた。この地区運動会にインターネットを通じて参加者を募り、地区住民約60名、地区外参加者約10名によって盛大に運動会が行われた。運動会の終わったあと慰労会では地区内外の参加者が交流をもった。

そして現地での交流が終わった後は、日常的に顔をあわせることのできない距離を電子的ネットワークが簡単に繋いでくれる。電腦同級生への登録者は、1996年10月末現在、約60名である。

3 「地域メディア」としてのインターネット

上のように山村のインターネット利用の一事例を見てきたが、ここでインターネットという電子的ネットワークと＜地域社会＞の結合に関して具体的なまとめを行っておこう。

まず新たな電子メディア＝インターネットによって『電腦中津川小学校』という活動が可能になった条件を整理してみる。

重要な条件としては、メディアとしてのインターネット（特にWWW）を利用する際のコストの低さ、そして自由度の高さである。一言に要約するなら、WWWホームページ自体が一つのメディアとして考えられるので、自前のメディアという（相対的に）自由な表現手段を低コストで得られることの意味は非常に大きいのである。僅かな経済的負担で、不特定多数を相手に情報発信が可能なメディアを個人的に所有できることの重要性は既に数多くの論者が指摘している。公的な援助がなくてもボランティアレベルで簡単に活動を

はじめることができるためにマスコミで取り上げられる可能性の少ない「小さな情報」であっても、発信の意志を持った人間が個人のレベルで自由に情報を発信することができるのである。情報発信コストの低さ、そして表現の自由度の高さは、社会の中で種々の情報の共有を押し進める巨大な推進力になっている。例えば、アメリカ合衆国においてNGO等の市民レベルでの情報発信・共有がインターネットというメディアの普及によって非常に活性化している様子を岡部一明が『インターネット市民革命』の中で報告している[岡部, 1996]。こうした自由度の高さが逆に様々な問題も産み出していることは忘れてはならないが、メディアとしてのインターネットの特性として最も注目すべき点であることに異論はないであろう。「地域メディア」としてのコストの低さは、CATVの導入と比べてみるとよりはっきり分かるだろう。

『電脳中津川小学校』は、林さんなどとの話し合いの中からまったくの思いつきで始まった。公的な機関や行政の介在なしに個人レベルで動き始めたため、自由に柔軟に企画をたて速やかに実行することができたのだと言える。実際、インターネットにホームページを開設するだけならそのコストは驚くほど低い。パソコンを所有し使用している人ならば、プロバイダーとの契約費用および月々の通信費数千円がかかるのみである⁹⁾。既にインターネットを利用している人ならばすぐに、そして過度の負担なくホームページというメディアを持つことができるのである。

また、インターネット等の新しい電子的メディアは、＜仮想社会＞という新たな空間の形成を可能にする。そこでは実社会から離れた新たな社会関係を自由に構築することができる。この自由さを強調した使用もちろん可能であるが、『電脳中津川小学校』のように現実の山村社会を反映し現実と接点を保ちながら、不足する要素を架空のものとして電脳空間の特性を生かすといった使い方もできる。この点については次章で詳しく展開する。

そして、コンピュータ・リテラシーあるいはメディア・リテラシーと地域社会の関係にも注目する必要がある。今後の電子メディアの発達とともに、このリテラシーの差が情報の決定的な格差を産み出すという危険性が一般に指摘されている。具体的には、世代間・年代間の格差や性別による差が問題にされており、メディアの個人化（パーソナル化）も同様の問題と考えられている[東京大学社会情報研究所, 1996,]。特に高齢化社会に向かう日本では、今後この問題が顕在化してくるはずである。

しかし、この『電脳中津川小学校』は極めて稀少な例外かもしれないけれども、こうし

⁹⁾プロバイダーとは、インターネットへの接続をサービスする業者の総称である。ここ数年の間に日本のインターネット環境は激変し、地方においてもかなりの程度インターネット利用環境が整ってきたといえる。1996年には各都道府県内に複数の接続業者が営業を行っている。

た不安を取り除いていく方向を指し示しているのではないだろうか。中津川地区において、パソコンを家庭に所有し使用しているのは、現在のところ林幸一さんのみである。しかし、『電脑中津川小学校』は集落＝コミュニティを中心にした活動であり、極端に言えば住民のうちただ1人だけでもパソコンを使うことができれば成り立つ活動だと思えることができる。住民はパソコンを所有してなくとも、様々な形で『電脑中津川小学校』に参加することが可能なのである。例えば、高齢者は村の歴史を語ったり藁細工を教えることで『電脑中津川小学校』の「先生」となり、林業家は森の話を語る「先生」となり、女性は地元の素材を用いて作る郷土料理の「先生」となる。コミュニティの構成員が、それぞれの形で多様な関わりを構築していく。このような参加形態は、都市化の進んだ個人社会ではかなり難しい課題だと考えざるを得ないけれども、農山村という地域社会の核が存在するコミュニティにおいては、それほど不可能なものではない。コンピュータ・リテラシーの格差を現実のコミュニティの機能が補っていく形で、『電脑中津川小学校』の活動は進んでいると言っていいたいだろう。

4 ＜地域社会＞と＜仮想社会＞

次に、インターネット等の電子メディアと＜地域社会＞についてのより抽象的な次元の考察に進もう。

現在の電子メディア社会論・インターネット論においては、サイバースペース（電脳空間）のなかでの人々の結びつき・コミュニケーションが中心的な議題となっている。多くの論者は、インターネットが創り出す「仮想共同体（ヴァーチャル・コミュニティ）」に言及しその可能性についての考察が溢れている。しかしこれらの議論には、＜現実社会＞と＜仮想社会＞との相互作用を積極的に取り扱う視点が欠けているのは上でも触れたところである。

ラインゴールドの『バーチャル・コミュニティ（*The Virtual Community*）

[Rheingold, 1993]は、そもそも著者の関わった地域パソコン通信ネットワークについて当事者の立場で報告したものであった。そこでは、地域というコミュニティをベースにした様々な活動が行われ、地域コミュニティの存在の上に「バーチャル・コミュニティ」が活性化し可能性を持つという方向の議論であった。ラインゴールドは、また『バーチャル・コミュニティ（*The Virtual Community*）』の中でほぼ一章を割き日本のネットワークについて触れているが⁽¹⁰⁾、そこで中心的に取り上げられているのも、大分県のCOARAという地域ネットワークの事例である⁽¹¹⁾。このように「バーチャル・コミュニティ」に参画した当事者による報

告は、現実の社会、地域社会との相互作用・相互依存的関係を前提にしているのに対して、最近の電子メディアに関する社会学的な議論においては、「バーチャル・コミュニティ」を現実社会との関係から切り離された仮想空間内に閉じこめようとする傾向が強い。

しかし、既に吉田が指摘しているように[吉田,1995]、「＜仮想社会＞と＜現実社会＞とのあいだの相互浸透」こそ社会学的に重要な課題と考える必要がある。電子メディアによって変容していく現代社会のなかでは、＜仮想社会＞と＜現実社会＞の関係は無視することの出来ない重要な領域を形成しているのだと考えなければならないのではないだろうか。このような観点から、『電脳中津川小学校』の事例を検討してみよう。

『電脳中津川小学校』の活動が示唆するのは、インターネットのような新しい電子的メディアと＜地域社会＞のあいだに柔軟な関係＝ネットワークを構築していく可能性である。過疎の山村の小さな集落にとって、インターネットという電子的メディアは地域と人々を結びつける手段として非常に重要な役割を担いはじめている。＜仮想社会＞と＜地域社会＞の双方が互いを求め合う形で相互浸透しているのである。サイバースペース（電脳空間）上の『電脳中津川小学校』という＜仮想社会＞は、地域の人々の心のよりどころとなり、また同時に都会の「電脳同級生」達の想いを仮託する場となっている。この意味で、『電脳中津川小学校』は＜仮想社会＞と＜地域社会＞双方のインターフェイス（境界面・接触面）と捉えることができるだろう。地域の象徴としての仮想小学校をインターネット上の電脳空間に創り出す。そして同時に、地域外に開かれた場所としての仮想小学校に電脳空間を通じて人々が繋がらう。『電脳中津川小学校』というヴァーチャルな空間に人々が集まり、そして現実の社会関係を結ぼうとしているのである。地縁・血縁など従来の社会関係とは全くレベルの違う新たな関係が始まり、＜地域社会＞内外のコミュニケーションが活性化・濃密化していく。

電脳空間は全く新しい「仮想共同体（ヴァーチャル・コミュニティ）」＝＜仮想社会＞を創り上げるものでもあるが、同時に既存の＜地域社会＞との相互浸透によって＜地域社会＞自体を拡張させるものである。『電脳中津川小学校』で得られるリアリティは、電脳空間上にありながら単なる仮構のみではない。『電脳中津川小学校』には現代の山村の生活が反映され、「そこにあるもの」としてのリアリティを失っていないのである。また、実際に中津川の現地スクーリングに参加した人々は、中津川の集落、そこで暮らす人々と出会い、その体験を持ちながら『電脳中津川小学校』という＜仮想社会＞に参加している。

⁽¹⁰⁾[Rheingold,1993]第7章「日本とザ・ネット」参照。

⁽¹¹⁾大分県のCOARAについては、その設立の経緯から[尾野,1994]に詳しく報告されている。

そこで共有され得るのは＜地域社会＞のリアルな情報、例えば地域としての歴史や記憶までも含まれる。この意味では、電子的メディアがうまく浸透した新たな＜地域社会＞とは、「時間・空間的な脱文脈性」[吉見,1994]という特性を生かしつつ、時間や空間を再文脈化し再構築していくという往復運動から産み出されるものであると考えられるだろう。『電腦中津川小学校』は、現実を反映しながら戦略的に再構成されたフィクション＝仮構という形で＜仮想社会＞と＜現実社会＞のインターフェイスとなり、両者を相互浸透させているのである。

この『電腦中津川小学校』の事例が示唆しているのは、電子的メディア・ネットワークは新たな関係性を創り出すだけでなく、既存の社会関係を豊かにする可能性を多分に含んでいるということである。とすれば、農山村のような＜地域社会＞としての核が存在するコミュニティは、日常生活のリアリティを引き継ぎながら新たな社会関係＝＜仮想社会＞に積極的に対応していけるはずである。もちろん個々の＜地域社会＞の差は明らかに存在しており幾つかの条件を満たす必要があるけれども総体として、＜地域社会＞と＜仮想社会＞の距離はそれほど遠く離れているわけではないのだろう。

電子的メディアによるコミュニケーションは、閉じられた世界の内部に止まっているわけではなく、＜現実社会＞との相互作用の産物であるということを忘れてはならない。メディアの中を飛び交う電子的記号は、単なる記号ではなく、生身の人間が意味を込めて用いる、つまりコミュニケーションの一部なのである。

おわりに

本稿では、山村のインターネット利用の事例（『電腦中津川小学校』）を取り上げ検討してきたが、新たな電子的メディア・ネットワーク経験の「始まり」を報告することで精一杯であり展開が不十分な点も幾つかある。一つの＜地域社会＞のモノグラフとしては厚みのない非常にラフなスケッチであるし、＜地域社会＞と電子的メディア・ネットワークの相互浸透という新しい経験を追うために手探りで進んでいかなければならない部分も多い。けれども、インターネットなどの新しい電子的メディアと社会についての議論において＜地域社会＞という場を見失わないようにするために、一つの素材の提供を行ったという意義はあるのではないかと考える。もちろん今後も調査を継続し、その後の展開をフォローしていくことが必要であるのは言うまでもないだろう。

さらに、従来、農山村を対象にした研究の視線は、主にイエやムラといった社会的制度や社会構造に向けられてきたのであるが、新たなコミュニケーションの可能性が広がって

きた現在から振り返ってもう一度、農山村におけるコミュニケーションの変容を社会史的に捉えておく必要がでてきたのではないだろうか。

参考文献

- Rheingold, Howard, 1993, *The Virtual Community*, John Blockman Associates. (会津泉訳『バーチャル・コミュニティ ―コンピューター・ネットワークが創る新しい社会―』三田出版会、1995年)
- 農業情報利用研究会編、1996、『農業情報化年鑑1996』
- 吉見俊哉、1994、『メディア時代の文化社会学』新曜社
- 嘉田由希子・大西行雄、1996、『ミニコミとしてのパソコン通信とインターネット』『メディアと情報化の社会学』岩波講座現代社会学22 岩波書店
- 遠藤薫、1993、『旅人たちのヴァーチャル・コミュニティ ―メディアの時代に「社会」はどのようにして可能か』今田高俊編『ハイパーリアリティの世界 ―21世紀社会の解読―』有斐閣
- 西垣通、1995、『聖なるヴァーチャル・リアリティ』岩波書店
- 岡部一明、1996、『インターネット市民革命』御茶の水書房
- 東京大学社会情報研究所編、1996、『情報行動と地域情報システム』東京大学出版会
- 児島和人・橋本良明、1996、『変わるメディアと社会生活 高度情報化社会における人間のくらしと学び1』ミネルヴァ書房
- 橋本和幸、1995、『地域社会に住む コミュニティとアメニティ』世界思想社
- 尾野徹、1994、『パソコン通信がつくるグローバルな地方 電子の国「COARA」』エーアイ出版
- 吉田純、1995、『＜仮想社会＞のコミュニケーション ―インターネットをめぐる社会学的一考察―』『京都社会学年報』第3号
- 佐藤俊樹、1996、『ノイマンの夢・近代の欲望』講談社

(のざき けんや・博士後期課程)

Communication and the Internet in Japanese Rural Communities : ‘Local Community’ and ‘Virtual Community’

Kenya NOZAKI

There are many studies and arguments about today's changes in our society and our communication owing to the Internet and 'the Cyber Space'. They tend to think that the Internet as a new medium produce 'new' style of communication, and it should be related to business or the culture of urban life and the young. But we need to observe the other fields in today's Japanese society, for example rural communities and our everyday life. Then we can consider the changes and what the 'new' communication is. This article is a report of my fieldwork about one 'local community' starting to use the Internet recently.

'Cyber Nakatsugawa Elementary School' opened in the internet as a virtual School on the Web May 1996 . Nakatsugawa is a small mountain village by the Shimanto River in Kochi Prefecture. In Nakatsugawa Village there was an elementary school, but it was closed for the time being because of the decrease of children. The depopulation of the villages in almost all Japanese mountain areas is getting worse and has become the serious problem. Many small villages are threatened with extinction by the depopulation. In this situation the school has an important role for the community. So the people and the parents in Nakatsugawa village opened 'Cyber Nakatsugawa Elementary School' as a spiritual school of the community. Some volunteers cooperate with them and I am taking part in this project.

'Cyber Nakatsugawa Elementary School' has made a relationship between the people living in Nakatsugawa village and the people coming together through 'The Cyber Space' the internet. They communicate with each other by using the network, and sometimes they meet together at Nakatsugawa. This kind of relationship has been producing new style of using network, for example the people who cannot use computer, especially aged people, can join the network thanks to the power of the local community that maintains warm hearted and face to face communication.